

学 位 論 文 題 名

魏晋史籍の研究

学位論文内容の要旨

本論文は、中国史上の一大変革期であり、「貴族」制社会が出現したとされる魏晋時代史を根底から見直し再構築する試みとして、これまで歴史研究の基本でありながら内容に即した本格的な検討が加えられず、わずかに書誌学的な観点を中心に史学史で扱われるにすぎなかった魏晋期成立の編纂史料について、特に西晋・陳寿『三国志』及びその周辺史籍の史料的性格を中心に考察したものである。

魏晋時代を語る現存する史料の多くは、説話文学が発達・流行し歴史人物の逸話形成が盛んになった六朝期に成立しており、後出のものほど創作に近い極端な潤色を加えられている。加えて三国の成立から江南への南渡までの目まぐるしい政治的・社会的変化という背景から、諸史料間における前代史理解が一樣ではないため、本来撰述姿勢の異なる諸史籍を同列に論じることが大きな困難を抱え込むこととなる。こうした事情にも拘らず、とりわけ時代史の再構築と密接に関わる政治史分野では、研究者が描く歴史理論に当てはまるように史料理解がなされる傾向は免れがたく、史料自体が語る論理やその信憑性はほとんど深刻に検討されることがなかった。また立脚点である史料そのものの主張する論理を等閑視して研究が進められてきた結果、往々にして研究者が解明する歴史事実が、実際には撰述者が理解誘導する誇張された歴史観そのものであることも少なくないのである。

こうした研究状況に鑑み、本論文では『三国志』の中でも、特に西晋帝室・司馬氏の正当性や「貴族」の系譜という当代的な問題と密接な関係を持つがゆえに、当時の「貴族」の関心が集まり、また西晋からの視点が反映されやすい『魏志』を中心として、以下の論点が検討される。

第一章『魏略』の基礎的研究では、『魏志』の研究に先立ち、まず裴松之の註引史料で最大の比重を占め、『魏志』の先行史籍に当る魚豢の『魏略』について論じる。魚豢の『魏略』は諸書に引用される佚文としてしか現存しないため、魚豢のもう一つの史籍である『典略』との関係と併せて不明な点が多く、清朝における目録学の分野において、また『魏志』倭人伝の成立という視点から盛んに議論されてきた。しかしながら、先行研究における関心は『魏略』と『典略』が同一異称の書であるのか、また成立年代がいつであるのかという特定の問題に集中するあまり、『魏略』が如何なる史籍であるのかという全体像についての総合的考察はなされてこなかった。本章では先行研究の問題点を整理するとともに、魚豢の『魏略』が曹魏末に成立した史籍であり、魚豢の同郷の先輩・韋誕が編纂に従事した曹魏の第二期「国史」たる『大魏書』を底本としながら、そこに独自の取材記事を加えていたことを指摘し、附表で想定される篇目を示して、その全体像の復元を目指している。

第二章『魏志』の史料系統について一池田温「東洋学からみた『魏志』倭人伝」に寄せて一では、第一章での検討を承け、池田温氏が提示する史料系統に関する論拠の史料批

判を通じて、曹魏「国史」と『魏志』、『魏略』、王沈『魏書』の関係を論じる。池田氏は、民国・張鵬一「補三国魏志魚豢伝」（『魏略輯本』所収）に多く依拠して議論を進めるが、実際には張氏が主張する論拠なるものは、確たる根拠のない張氏の思い込みによるものにすぎず、したがって池田氏の所論には不正確な記述が散見される。こうした史料批判を通じて本章では、曹魏の斉王期に編纂された先代・明帝の時期までを主な撰述対象としたと見られる第二期「国史」の章詒『大魏書』が『魏略』の底本となり、次の高貴郷公の正元年間に斉王期までの統撰と章詒『大魏書』の整理を行う目的でなされたと見られる第三期「国史」が後に王沈『魏書』として成立し、陳寿はこの両書を参照しながら『魏志』を成立させたと考察する。特に『魏志』東夷伝に限って見れば、その記述のすべてが斉王の正始年間で終わることから、王沈『魏書』東夷伝に依ったものであった。

第三章「陳寿伝の研究」では、『魏志』を語る上で、最も基本となる撰述者・陳寿の事跡の再構築を試みる。陳寿の伝記史料には東晋・常璩『華陽国志』と唐代に編纂された『晋書』とがあるが、どちらにも記載の混乱がある上に、相互に齟齬をきたす部分が少くない。そのため先行研究では、根本的な史料批判や関連史料の積極的な利用が十分に行われていないまま、『華陽国志』を陳寿に肩入れした偏向性の強い史料と位置づけるとともに後出の『晋書』を拠るべき史料と見なし、これを中心に据えた事跡の再構成を行う傾向にあった。本章では、実際には『晋書』陳寿伝が基本的に『華陽国志』陳寿伝に依拠して描かれるとともに、原資料の誤解から新たな説話の創作や史料改竄をも行っていることを明らかにし、改めて周辺史料の総合的な検討から、これまで不明な点の多かった陳寿の事跡を再構築している。

第四章「『魏志』の帝室衰亡叙述に見える陳寿の政治意識について」では、前章までで検討してきた成果を踏まえて、『魏志』の論理構造に即して陳寿の政治意識について考察する。これまで叙述内容が検討の対象になることは少なかったが、王朝興亡史たる正史の軸となる帝室のあり方に注目すると、『魏志』では曹魏帝室の衰亡は曹丕・曹植の「後嗣争い」に端を発した至親諸王抑圧政策と、外戚の重用に由来するものと位置づけられ、あるいはこうした理解が撰者によって誘導されている。こうした叙述に関して本章では、原資料の批判によりそれが陳寿の恣意的な史料操作により極端に誇張・偏向されたものにほかならなかったことを明らかにし、こうした操作を行わねばならなかった必然性が、『魏志』が撰述された西晋・太康年間初期にあって朝臣の多くが危惧する、輔政に当らせるべき至親たる皇弟・斉王攸の帰藩、外戚楊氏の台頭、さらに皇太子の継承を動揺させかねない寵妃・胡貴嬪の存在に由来していたことを指摘している。

附録「書評 中林史朗・渡邊義浩『後漢紀』」では、近年抄訳の出た東晋・袁宏『後漢紀』について、書評を通じて袁宏の歴史観の一端を考察している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 津 田 芳 郎
副 査 教 授 三 木 聰
副 査 教 授 伊 東 倫 厚

学 位 論 文 題 名

魏 晋 史 籍 の 研 究

本研究は、中国史上の魏晉時代史を見直す試みとして、これまで書誌学的な研究以外に本格的な検討が加えられること少なかった魏晉期成立の編纂史料について、特に西晋・陳寿『三国志』及びその周辺史籍の史料的性格を中心に考察したものである。

魏晉時代を語る現存する史料の多くは、後出のものほど創作に近い極端な潤色を加えられ、目まぐるしい政治的・社会的変化という背景から、諸史料間における前代史理解が一樣ではなく、本来撰述姿勢の異なる諸史籍を同列に論じることには大きな困難が伴う。しかし既往の政治史研究においては、史料自体が語る論理やその信憑性はほとんど深刻に検討されず、往々にして研究者が解明する歴史事実が、実際には撰述者が理解誘導する誇張された歴史観そのものであることも少なくない。こうした研究状況に鑑み、本論文では『三国志』の中でも、当時の「貴族」の関心が集まり、また西晋からの視点が反映されやすい『魏志』を中心として、以下の論点が検討される。

第一章「『魏略』の基礎的研究」では、『魏志』の研究に先立ち、まず裴松之の註引史料で最大の比重を占め、『魏志』の先行史籍に当る魚豢の『魏略』について論じる。魚豢の『魏略』は佚文としてしか現存しないため、魚豢のもう一つの史籍である『典略』との関係と併せて不明な点が多い。本章では魚豢の『魏略』が曹魏末に成立した史籍であり、魚豢の同郷の先輩・韋誕が編纂に従事した曹魏の第二期「国史」たる『大魏書』を底本としながら、そこに独自の取材記事を加えていたことを指摘し、附表で想定される篇目を示して、その全体像の復元を目指している。

第二章「『魏志』の史料系統について—池田温「東洋学からみた『魏志』倭人伝」に寄せて—」では、曹魏「国史」と『魏志』、『魏略』、王沈『魏書』の関係を論じる。本章では、曹魏の斉王期に編纂された先代・明帝の時期までを主な撰述対象としたと見られる第二期「国史」たる韋誕『大魏書』が『魏略』の底本となり、次の高貴郷公の正元年間に斉王期までの続撰と韋誕『大魏書』の整理を行う目的でなされたと見られる第三期「国史」が後に王沈『魏書』として成立し、陳寿はこの両書を参照しながら『魏志』を成立させたと考察する。特に『魏志』東夷伝に限って見れば、その記述のすべてが斉王の正始年間で終わることから、王沈『魏書』東夷伝に依ったものであるとの結論が得られる。

第三章「陳寿伝の研究」では、『魏志』の撰述者・陳寿の事跡の再構築を試みる。陳寿の伝記史料には東晋・常璩『華陽国志』と唐代に編纂された『晋書』とがあるが、どちらに

も記載の混乱や相互に齟齬をきたす部分が少なくない。本章では、『晋書』陳寿伝が基本的に『華陽国志』陳寿伝に依拠したものであること、原資料の誤解から新たな説話の創作や史料改竄をも行っていることを明らかにし、陳寿の事跡を再構築している。

第四章『魏志』の帝室衰亡叙述に見える陳寿の政治意識についてでは、『魏志』の論理構造に即して陳寿の政治意識について考察する。『魏志』では曹魏帝室の衰亡は曹丕・曹植の「後嗣争い」に端を発した至親諸王抑圧政策と、外戚の重用に由来するものと位置づけられ、あるいはこうした理解が撰者によって誘導されている。本章では、それが陳寿の恣意的な史料操作により極端に誇張・偏向されたものと指摘し、こうした操作を行う必然性が、『魏志』が撰述された西晋・太康年間初期のいくつかの政治状況と、それらに対する陳寿の批判的態度や政治主張に由来すると論じている。

附録「書評 中林史朗・渡邊義浩『後漢紀』」では、近年抄訳の出た東晋・袁宏『後漢紀』について、書評を通じて袁宏の歴史観の一端を考察している。

本研究は、魏晋時代研究の基本素材となる史料を、その成立状況、成立の社会的・政治的背景、伝承関係、撰者の事跡、撰者の政治意識といった方面から精密かつ丹念に検討した労作である。本研究によって、清朝考証学以来続いた『魏略』と『典略』との関係、及びその基本構成という問題はほぼ解明されたと言ってよい。また陳寿伝の史料系統、及び『魏志』の偏向・曲筆といった問題がなぜに生じたのかといった問題の解明も大きく前進した。長期に涉り多くの人が発言してきた問題に正面から立ち向かう勇気と、史料に淫した人でなければ成し遂げえない執拗な追求心が、本研究の成果となって結実した。

一方において、本研究には研究史を精確に理解したうえで批判を行うという面でやや不十分さが見受けられ、また性急な独断に走る傾向もいくつか見受けられる。それらは本研究全体に影響を与えるほどの瑕疵ではないが、なお今後の注意を要する点である。

以上から、本審査委員会は全員一致で本研究を博士(文学)に相応しいものと認定する。